

琉球大学学術リポジトリ

[巻頭言] トリレンマを視野に

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大屋, 一弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015426

巻 頭 言

— トリレンマを視野に —

副会長 大 屋 一 弘

目の前のご馳走は食べたい、しかし食べると太る、或いは高血圧が心配だ。食べるべきか我慢して控えるか、その人は少なからぬジレンマを感じることであろう。虫のつかない綺麗な野菜を作り、良い値で売りたい。そのためには群がり来るモンシロチョウから守るのに、何回も何回も農薬を散布する必要がある。しかしその野菜を食べる消費者には、散布した農薬が残留しないように気を配らなければならない。綺麗な野菜を作りたい、しかし残留農薬は困るという、これもジレンマ（相反する2要因の存在）であり、この様なジレンマは日常の生活や、仕事において遭遇することしばしばである。

今や人類の富を求める活動は盛んで、著しい経済発展がもたらされた。一方で、世界の人口（現在約60億人）は増加を続け、21世紀中頃には100億人に達すると言われる。地球の生態系にこれだけの人口扶養能力があるかどうか危機感の持たれるところである。勿論この人口を支える食糧生産は必至であり、そのために膨大な資源や、エネルギーの投入が行われよう。残念ながら地球上の資源やエネルギーは無限に得られるものではない。我々は経済発展や食糧生産のため知らず知らずのうちに資源やエネルギーを枯渇させ、同時に環境を劣化させる傾向にある。これはまさにジレンマを越えたトリレンマである。

作物生産に限ってみると、以前は科学的農業の成果として最大収量（マキシマムイールド）が議論の対象とされる場合が多かったが、最近は経済発展、資源確保、環境保全のバランスを考慮して、最適収量（オプティマムイールド）への取り組みが目標とされるようになった。

沖縄という小さな地域の農業発展に寄与しようとする我々の活動においても、経済発展、資源確保、環境保全がトリレンマ（相反する3要因）とならないよう、その相克を和らげる手法の模索が求められているのが現代ではないだろうか。